

満漢字清文啓蒙に於ける満洲語音韻の考察 (3)

池 上 二 良

An Inquiry into the Phonology of Manchu in
the *Man-han-tzū Ch'ing-wên-ch'i-mèng* (3)

Jirô IKEGAMI

§ 40 異施清字の条にはつぎの語例がみえてゐる。

47オ	ebi habi	惡音 切 逼咳逼	ëibi haibi	ぼんやりした
"	ebihe	惡意 切 逼呵	ëibihë	飽いた
48ウ	te bicibe	賦衣 切 逼七撥	tëi bicibo	今と雖も
"	cabi	釵批	čaiپی	獸の下腹部の毛皮
48オ	hafirambi	咳非拉嚙	haifirami	追ひつめる
"	hafirahūn	咳非拉婚	haifirahun	窮迫した
47オ	efimbi	惡意非嚙 切 切 嚙	ëifiemi	遊ぶ
"	efiku	惡意非嚙 切 切 枯	ëifieku	遊戯
48オ	hamimbi	咳嚙嚙	haimimi	足りる
"	haminambi	咳嚙那嚙	haiminami	略、近づく
48ウ	damin	豨嚙因 切	daimin	驚
47オ	ekisaka	惡意欺薩喀 切	ëikisaka	悄然とした
"	ekiyehabi	惡意切呵逼 切	ëikiehëbi	欠けた、腫れがひいた
48ウ	dakilambi	豨衣拉嚙	daiilami	整理する
50オ	ergi 不滾舌	惡衣雞 切	ëigi	…の方、…の側
"	cargi 不滾舌	釵雞	čaiגי	あちら
48オ	hahi cahi	咳稀釵稀	haihi čaihi	緊急な
"	hahiba	咳稀八	haihiba	すばやく
"	hahilambi	咳稀拉嚙	haihilami	急ぐ
48ウ	dehi	得衣稀 切	dëihi	四十

ebi habi に当てた漢字のうち音は意の誤字とみられる。

ergi に用ゐた惡衣切の反切は、他に一例見出されるだけであるが (§35参照)、一般に用ゐられてゐる惡意切と同様に *ej* と転写する。

以上の各例においては (dakilambi を除く), bi, pi, fi, fie, mi; Ki, gi, hi の前に i が現れてゐる。この事実は語中においてみられる。ただし, te bicibe の一例では二単語間においてであるが、この二単語は一つの息の段落として発音されるものと考へられる。このことは、明かに或口語の発音を反映するものとみられる。すなはち, bi, pi, fi, fie, mi; Ki, gi, hi の各音節中の唇音及び軟口蓋音の子音は硬口蓋化してゐて、その入りわたり音ないしさらにそれより発達した [j] をこれらの語形は表してゐると考へられる。

なほ ergi, cargi に対する *eigi, čaigi* は, r が脱落した後の形である。 (§16 参照)

efimbi, efiku については、ザハーロフの満露辞典には、そのほかにそれぞれの同義語として efiyembi, efiyeku の語を挙げてゐる。本条の ëfiemi , ëfiyeku の形はむしろこの方の形に近い。ekiyehebi については、下記の同根語が本条にみえる。

47オ ekiyehun 悪缺婚 ëküehun 欠乏

この ëküehun には i が現れぬが、おそらくこの形は、シナ化した特殊な満洲語において、満洲語の ekiyehun の単語とシナ語の缺（この現代北京音は ch'üeh^1 である）の語との混淆 (contamination) により生じた形と思はれる。

ergi, cargi の例が清語易言に載つてゐることはすでに記したが (§16)、同書にはそのほかに、

cabi (賺皮) を, cai pi と云ふ,

dehi (四十) を, dei hi と云ふ,

とみえ、またさらに、

ha (哈) を, hai (海) と云ふ,

da (達) を, dai (代) と云ふ,

e (我) を, ei (我衣) と云ふ,

とあるのも上述の事実を指すとみられる。

上に除外例として来た dakilambi の例は、*k がその入りわたり音から発達した [j] の音を残して消滅したことを示すものとも考へられる。

なほ、上述の当該子音を含む音節の前の音節に円唇後舌母音の現れる語例のみられないことは、注意せねばならぬ。

また本条には é , j , é について、これに類似する例はつぎの一例だけであることも注意される。

49オ jiduji 朱堆飢 juduiji 結局, 要するに

この場合、当該子音の前の母音は円唇後舌母音である。

§ 41 異施清字の条にはまたつぎの語がある。

49ウ boigon 贅婚 biehun 家族, 家産, 一戸

服部先生の調査された吉林省扶余の老人の満洲語においてはつぎの語がある。

$\text{bjao}^{\text{h}}\text{gün}^{\text{h}}$ 土 文語形 boihon

御製増訂清文鑑打牲類には boiholohobi, biyohalaha (打住又脱落 獣などが一度網や罾にかかったがまた脱した) の同義語がみえてゐる⁽⁹⁴⁾ 後者の形において、iyo に続く音節に o でなくて a が現れる点、iyo はおそらく扶余の老人の口語形にみられる様な音を表すと考へられる。

文語形 oi に関するかかる語形も、十分に注意すべきものである。

なほ、服部先生の同調査の吉林の老人の満洲語にはつぎの語がある。

hòigün^{h} 土 文語形 boihon

この語形が上掲の語形とともに文語形の h に対して有声閉鎖音をもつ点は、すでに服部先生によつて指摘されたが、異施清字の条の語形では逆に文語形の g に対して h が現れてゐる。これは上述の (§ 22) 現象とみられるが、boigon (土), boihon (家族, 家産, 一戸) の語形は、口語では相当混用されたのではないかと想像する。さらに § 22 に述べた現象はこの両者の区別を一層曖昧にするものである。ザハーロフの満露辞典にも、この二語が互に代用されることが記されてゐる。

また同条につぎの語がある。

44ウ jui 拘 jü 子供

拘の漢字は本書では他に用ゐられてゐないが、現代北京音は chü^1 であり、これを jü と転写する。特にこの語においては、四十六丁表より前にあり、従つてこの語形が一般的のものである

としてゐる点が注意される。

清語易言にはつぎの様に記されてゐる。

jui (兒子) を gioi と云ふ、

ioi は現代北京語の ü の如きシナ語の音韻を写すに用ゐられるが、j に対して g の現れるはずは決してなく、この点或はこの書にはいはゆる尖団の区別がないかもしれず注意される。

また服部先生は「(前略) ダグール語の [džy:] (自分の兄或は弟の息子、日本語では甥) は満洲語の「子」を意味する単語に由来するものであらう (後略)」と記されてゐる⁽⁹⁵⁾ この語形は上掲の語形に相当するものであり、これら二例から推して、異施清字の条の語形も上に転写した如きものと考へられる。

なほ、ザハーロフもこの語について触れてゐる。

(前略) 同様に jui чжуй といふ語も北京の満洲人によつて цзюй (tszyui) と発音されるが、一方複数においては чжусэ (chjuse) と正しく発音される⁽⁹⁶⁾

この цзюй (tszyui) は jü と同音と考へられる。

ただし、服部先生の調査された吉林の老人の満洲語においてはつぎの語形がある。

zūi 兒子 文語形 jui

これは文語形とも考へられる。

jü の語形が、シナ化した特殊な満洲語だけの語形であるとは、断定できない。

第十字頭の母音字

§ 42 第十字頭において、ao を含む単字に対しては、現代北京語で二重母音 ao¹ を含む漢字 (ただし ao, jao に対しては ao⁴ である傲, ao² を含む饒) を当てるか、或は現代北京語で単母音 a を韻母にもつ漢字を上字とし、幽を下字とした反切を当ててゐる。なお、yao, wao については § 49, 50 参照。

幽の漢字は、本書においてこの字頭の ao, eo, io, oo, uo, ūo を含む単字に対する反切の下字に用ゐられるものであり、この漢字の用例としては清字切韻法の条に sio(修) の反切を si(西), yeo(幽) と記してゐる。幽の現代北京音は yu¹ である。

すなはち、ao には、ao^{1,2,4} または反切による a-u の音が当つてゐる。本稿では、これらの漢字表記はそれぞれ au, ay と転写する。なほ、現代北京音の ao は、あとの o の円唇後舌母音が第三、四声においては、第一、二声においてより広い。以下に述べる ou, iu (yu) の u についても同様である。

なほ、zao に当てた饒の漢字に本音念と付記されてゐる点については、§ 26 に既述した。

この字頭の上述の ao も下向二重母音を表すと考へられるが、その副音の円唇後舌母音の広さについては明確ではない。

§ 43 第十字頭において、eo を含む単字に関しては、単字 eo に対しては悪右切を当て、t, d, s, š, c, j, g, dz に eo の結合した単字に対しては、現代北京語で二重母音 ou¹ を含む漢字 (ただし zeo に対しては ou² を含む柔) を当ててある。p, b, m, f, k, h に eo の結合した単字に対しては、現代北京語で単母音 o を韻母にもつ漢字を上字とし、幽を下字とした反切を当て、また n, l, r, ts' に eo の結合した単字に対しては、現代北京語で単母音 ê を韻母にもつ漢字を上字とし、幽を下字とした反切を当ててある。weo については § 50 参照。yeo については後に述べる。

単字 eo に当てた悪右切の右の漢字は、本書では他の場合に用ゐられてゐないが、現代北京

音は yu^4 である。

すなはち、子音文字と結合した eo には、 ou^{l2} または反切による $o-u$, $\hat{e}-u$ が当つてゐる。単字の eo には、反切による $\hat{e}-u$ の音が当つている。これらの漢字表記をそれぞれ ou , ou , $\hat{e}u$ と転写する。

なほ、 feo , keo , heo に当てた反切上字は佛、𪛗、呵である。本稿では佛の韻母が fe に当てられた場合と fo , $f\bar{u}$ に当てられた場合に、それぞれ \bar{e} , o と二様に転写し、また𪛗、呵の韻母は \bar{e} と転写することはすでに述べた (§28, 27参照)。この場合の佛の韻母は、従つて \bar{e} と転写される。それゆゑ feo , keo , heo の場合の転写は ou ではなく $\hat{e}u$ である。

上述の様に、 eo に対する転写は、 $\hat{e}u$ 及び ou , ou の二種があることになる。これは転写上一貫性を欠くものであるが、本書からは eo の表す音についていまだ明確に知ることはできないゆゑ、その転写も単にそのいづれかに統一することは差控へる。しかし、或は本書で teo , deo , seo , $s\bar{e}o$, ceo , jeo , geo , $dzeo$, $\check{z}eo$ に当てられた倫、兜、颯、収、抽、州、勾、鄒、柔の漢字音の韻母は、現代北京語では二重母音 ou であるが、本書の基くシナ語においてはそれと主音の異なる二重母音、おそらく $[əu]$ ではないかと臆測される。(§47 参照)

yeo に対しては、現代北京音が yu^1 である攸が当てられ、この例は特異であり、§49 参照。

なほ、 eo の表す音についての資料として、ほかに諺文文献中の漢清文鑑の諺文転写及びザハーロフの記述がある。(別の拙稿「満洲語の諺文文献に関する一報告」第三項参照)

§44 第十字頭において、 io を含む単字に関しては、単字 io に対して悠の漢字を当て、子音文字と io の結合した単字に対しては、現代北京語で二重母音 iu^1 を韻母とする漢字を当てるか、或は現代北京語で単母音 i を韻母とする漢字を上字とし、幽を下字とした反切を当ててゐる。

単字 io に当てた悠の現代北京音は yu^1 であり、 yu と転写する。

nio に当てた𪛗は、既述の様に現代北京音は不明であるが、現代北京音の niu に相当する音を表すとみる。(§9, 54参照)

mio に対する反切上字に用ゐた𪛗は、既述の様に現代北京音は不明であるが、現代北京音の mi に相当する音を表すとみる。(§9, 30参照)

fio に対する反切上字に用ゐた非の現代北京音は fei^1 であるが、本書では声母、韻母がそれぞれ現代北京音の f , i に相当する音を表すとみる。(§30参照)

すなわち、この場合の io には、二重母音 yu^1 , iu^1 または反切による $i-u$ の音が当つてゐる。その漢字表記をそれぞれ yu , iu , iu と転写する。満洲字の io はおそらく二重母音を表すと考へられるが、子音文字と結合した際にその i は単にその子音が口蓋化子音であることだけを示す場合もあると考へられる。なほこれと異なる音を表すとみられる漢字を io に当てた例がある(次節参照)。

§45 異施清字の条にはつぎの語がみえる。

46ウ	$gio-$, gio	雞啣 切	$\acute{g}io$	gio のろの一種 (動物名)
51ウ	$giodohon$	雞啣 切 多婚	$\acute{g}iodohon$	顔つきのひきしまつた、敏捷な
"	$giohošombi$	雞啣 切 豁説啞	$\acute{g}iohuošuomi$	乞食する
"	$giohoto$	雞啣 切 豁托	$\acute{g}iohuoto$	乞食
"	$gioro$	雞啣 切 囉	$\acute{g}ioro$	(固) 覚羅

51オ	niokan	呢啣 切堪	niokan	遊戯の矢
47ウ	niyaniombi	呢呀 切切	nianiyomi	嚼む
51オ	niobombi	呢啣 切撥	niobomi	からかふ
"	niomošon	呢啣 切摸	niomošun	魚名
"	niorombumbi	呢啣 切囉	nioromubumi	磨く
"	niolodombi	呢約 切囉	niolodomi	(意義不明)

雞啣切, 呢啣切は, 切韻字の giyo, niyo に当てた反切であり, *gio*, *nio* と転写するものである。niolodombi に対して用ゐた呢約切の約の漢字は, 本書では他には用ゐられてゐない。現代北京音は yüeh¹ であるが, 或場合には yo¹ の音もある。本書ではおそらく啣の誤字とみて, 同様に *nio* と転写する。*gio*, *nio* に含まれる母音が二重母音か単母音かは, あきらかでない。また, 前節に述べた *yu*, *iu*, *iu* の表す母音の音価が不明確であるのに反し, この場合は *o* の表す母音が極狭くはない円唇母音であることだけは知られる。これに対し, *yu*, *iu*, *iu* の *u*(*u*) が表す母音は, それより狭い円唇母音ではないかとも臆測される。なほまた, 上掲の *niokan*, *nianiyomi* の両語形においては *nio* が *a* と共存し, 他の諸語形においては *gio*, *nio* が第一音節をなし, 第二音節に *o*, *uo* が現れてゐる点は, 母音調和及び前述の母音の円唇性に関する制限に関連する問題である。*niomošun* の語形に関しては, ザハーロフの満露辞典も *niomošon* と共に古廢語として *niomošun* の形を挙げてゐる。

また *gio*- の無意味の単なる音節に雞啣切と記したのは, この音節一般について述べてゐるのであるが, 満洲語の *gio*- を語頭音節にもつ諸語形の多くがいはゆる男性語であることに注意せねばならない。なほ清語易言にもつぎの様にある。

gio (究) を, *giyo* (角) と言ふ,

満洲外聯字の条には「*niokso* 呢啣切 珂梭 水内青苔絨。」の例がみえるが, また「*niongniyaha* 姓翁呢呀哈 鷺。」の例のあることが注意される。すなはち, 両者はそれぞれ *niokoso*, *niunniaha* と転写されるものであり, 前者では上例の様に *nio* の後続音節に *so* が現れるが, 後者では *niun* が *a* と一語内に共存してゐるのである。

異施清字の条には既述の様に (§ 34), *nionggajambi*, *nionggajarahū*, *nionggalambi* の三語の *niong* には姓汪切と当ててゐて, これが或は本節に述べると同様な母音を含むかもしれない。また同条にはやはり既述の様に (§ 14), *bonio* に摸姓 *moniu* が当てられてゐて, この語においては第一音節の *o* に第二音節の *iu* が続いてゐる点に注意される。

io の表す音に関する資料として, ほかに諺文文献中の漢清文鑑の諺文転写及びザハーロフの記述がある。(別の拙稿「満洲語の諺文文献に関する一報告」第三項参照)

§ 46 異施清字の条にまたつぎの語がある。

45オ *jio* 朱 *ju* 来い
清語易言にもつぎの様にある。

jio (来) を, *ju* と言ふ,

これについてはザハーロフの記述がある。

jimbi цимби の命令形 *jio* 来いといふ語は北京の満洲人よつて цю (*tszyu*) と発音されるが, 一方においては, この動詞が二次的動詞を形成するために他の動詞と組合はさるとき((括弧内の原文は略す)), 命令法においては чжу *ju* と書かれ, さう発音される, 例へば *dosinju* досиньчжу, 従つて前者は чжю (*chjyu*) と読むべきであらう。

(後略)⁽⁹⁷⁾

jimbi (来い) の命令形 jio 及び -ji- を含む他の動詞の命令形中の -ju については、なほ考究せねばならぬ。

§ 47 第十字頭において、単字 oo, ūo には窩幽切の反切を当て、単字 uo には屋幽切を当ててゐる。子音文字と oo, ūo の結合した単字 (ただし dzoo, žoo, kūo, gūo, hūo を除く) に対しては、現代北京語で o, uo を韻母にもつ漢字を上字とし、幽を下字とした反切を当ててゐる。ただし、uo を韻母とする漢字を上字とするのは、šo, šūo と k, g, h, k', g', h' と結合した oo に対してだけである。子音文字と uo の結合した単字 (ただし dzuo, žuo を除く) 及び kūo, gūo, hūo に対しては、現代北京語で u を韻母にもつ漢字を上字とし、幽を下字とした反切を当ててゐる。yoo, yūo については § 49 参照。yuo については後に述べる。なほ oo の窩幽切の付記は次節に触れる。

ただし pūo に当てた披幽切の披は、現代北京音は p'i', p'ei' であるが、本書では他に満洲字に当てた例はなく、坡の誤字とみる。坡の現代北京音は p'o' であり、本書では pe, po, pū に当て、また peo, poo に対する坡幽切に用ゐられてゐる。

すなはち、単字 oo, ūo には、反切による wo-u の音が当つている。単字 uo には、反切による wu-u の音が当つている。その漢字表記をそれぞれ wou, wuu と転写する。子音文字と結合した oo, ūo (ただし dzoo, žoo, kūo, gūo, hūo を除く) には、反切による o-u, uo-u の音が当つてゐる。その漢字表記をそれぞれ ou, uou と転写する。k, g, h と結合した ūo と子音文字 (dz と ž を除く) と結合した uo には、反切による u-u の音が当つてゐる。その漢字表記を uu と転写する。これらは、すべて反切によつて表されてゐる。

ただし、dzoo, dzuo には、dzeo と同様に鄒の漢字を単独に当ててある。この現代北京音は tsou' であり、jou と転写する。

žoo, žuo には、žeo と同様に柔の漢字を単独に当ててある。この現代北京音は jou² であり、žou と転写する。

oo, ūo, uo の表す音は二重母音とみられるが、そのいずれもが満洲語に実際にあるかは疑問である。おそらく少くとも或ものは、字頭中の文字の結合に対して人工的に当てた音ではないかと考へられる。

なほ dzoo, žoo に当てた鄒、柔の漢字を除いては、現代北京語で二重母音 ou を含む漢字が、上記の様に eo に対して用ゐられ、oo に対して当てられてゐない点は、一応注意すべきである。この点から、満洲字の eo と oo とは少くとも一部の場合に音が異り、一方、現代北京語で二重母音 ou をもつ漢字が本書ではそれと主音の異なる二重母音をもち、それはむしろ eo を写すに適當な音、おそらく [əu] の如き音ではなかつたかと臆測する (§ 43 参照)。もし現代北京語の ou の如き音であつたならば、満洲字 oo を写すにも適當であらうと想像するからである。

yuo に対しては、現代北京音が yü' の淤と幽の反切が当てられ、この例は特異であり、§ 49 参照。

§ 48 異施清字の条にはつぎの語がある。

46ウ	boo-, boo	撥	bo	boo 家
51オ	boobai	撥拜	bobai	宝物
〃	booha	撥哈	boha	酒の肴
51ウ	coociyali	綽拙哩	čoóiali	鳥名
46オ	cooha	綽哈	čoha	兵隊

46ウ	doo-	多	do	
51オ	doombi	多嚙	domi	河を渡る
51ウ	doobuha	多不哈	dobuha	渡らせた
51オ	doosi	多詩	doši	貪慾
"	doosidambi	多詩搭嚙	doši dami	貪り取る
"	dooran	多 ^拉 因 ^切	doran	まだ野火をつけぬ未開墾地
46ウ	hoo-	豁	huo	
51オ	hoošan	豁山	huošan	紙
46ウ	joo-	拙	jo	
51ウ	joolambi	拙拉嚙	jolami	手を拱く
"	joolabuha	拙拉不哈	jolabuha	手を拱かせた, 交代させた
"	joolibumbi	拙哩不嚙	jolibumi	贖はれる
"	jooligan	拙哩慾	jolihan	贖ひ
46ウ	koo-	顆	kuo	
51オ	kooli	顆哩	kuoli	法例
46ウ	loo-	囉	lo	
44ウ	soo-	梭	so	
46オ	soorin	梭 ^哩 因 ^切	sorin	帝王の位
46ウ	too-	托	to	
51オ	toodambi	托搭嚙	todami	還す
"	tookabumbi	托喀不嚙	tokabumi	遅らせる
"	tookaha	托喀哈	tokaha	遅れた
"	toombi	托嚙	tomi	罵る
46オ	toose	托塞	tosē	権力, 錘
46ウ	yoo-, yoo	哟	yo	yoo はれもの
51ウ	yonambi	哟那嚙	yonami	はれものができる
46オ	yooni	哟呢	yoni	ことごとく
"	yoose	哟塞	yosē	錠前
47オ	ayoo	阿哟	ayo	…かと恐れる
47ウ	ujen cooha	屋襟綽哈	wujin čoha	漢人の兵隊
48オ	haša boo	哈詩撥	haši bo	穀類を入れて置く小さい物置

なほ最後の例は清語易言にもみえる。すなはち、

haša boo (倉房) を, haši bo と云ふ、

とある。

また doombi, toombi は満洲外聯字の条にもみえ, 上掲の場合と同じ漢字を当て, 意味は前者が「擺渡過河。」とあり, 後者が「罵。」とある。

上掲の諸例において, 文語形の oo に対しては, 前節に述べた ou, uou の漢字表記がなされず, o, uo と表記されてゐる。o, uo は, 一般には満洲字の o に当てたものである。しかしこの場合には, 母音の長さも問題であり, 或は長母音かと考へる。

清字辨似の条の音同字辨似の項には, 語形中相当する位置にそれぞれ o, oo が現れる以外は同形である二単語づつを, 意味を付して対照してゐる。

異施清字の条にはまたつぎの語がみえる。

46ウ joo 拙 jo 充分だ, 罷めておけ

		または詔	jau	詔
46オ	doose	刀塞	dausē	道教の僧, 道士
46ウ	hoo	蒿	hau	毫(重量の単位)
45オ	loo	牢	lau	牢獄
46ウ	poo	砲	pau	大砲

これらはシナ語よりの借用語の場合である。上掲の例中、詔を意味する joo と loo, poo においては、満洲字に当てた漢字がすなはちそれらのシナ語における原語であり、doose のなかの doo 及び hoo は、それぞれシナ語の道及び毫を写してゐる。詔、牢、砲の漢字は、本書では他に満洲字に当てた例がないが、現代北京音がそれぞれ chao⁴, lao², p'ao⁴ である。刀、蒿の漢字は、満洲字 dao, hao に当てている漢字でもあり、現代北京音はそれぞれ tao¹, hao¹ である。すななち、joo の一つの意味における語形を除いては、oo に対して ao が当つてゐる。従つて oo は ao の音 (§42 参照) をもつ場合もあるのである。その漢字表記は au と転写される。これらの語の oo の表す音は、シナ語における [au] と [o] の方言間の相違、もしくはその二音間の歴史的変化を反映してゐると考へられる。

なほ異施清字の条には、つぎの例が一括されてゐる。

42ウ	oo	敖
"	noo	脳
"	hoo	毫
"	boo	宝
"	poo	袍
"	šoo	韶
"	too	桃
"	doo	道
"	loo	老
"	moo	毛
"	coo	朝
"	joo	趙
"	yoo	堯
"	ts'oo	曹

これらは、それぞれのシナ語の単語を満洲字で写したのであるから、転写及び意味を付けないが、oo で写したシナ語音も現代北京語では ao である。

oo についてのザハーロフの記述を示す。

もしその(訳註 o を指す)後に他の o (o) があれば満洲語の諸単語においては長い或は二重の o に発音される、例へば boo 𠂇oo (boo) 或は 𠂇o (bō) 家。だがもしシナ語の諸単語或はシナ語の諸単語からの派生語においてならば、ao (ao) と発音される、例へば boo 国璽は 𠂇ao (bao) と、(シナ語の単語 𠂇ao (bao) からの) boolambi は 𠂇ao-ламби (baolambi) と、(シナ語の 𠂇ao сы (dao sui) からの) doose は 𠂇aoсэ (daose) と読まれる。⁽⁹⁸⁾

すなはち oo についてやはり少くとも二種の発音があることが、この記述からも知られる。

なほ異施清字の条のつぎの一語を付記する。

42ウ	dzuo	走
-----	------	---

これもシナ語の単語を満洲字で写したものであるから、意味と転写は付けないが、走の現代北京音は tsou³ であり、この場合現代北京語の二重母音 ou が uo に当つてゐる。

y 及び y と単字をなす母音字

§ 49 十二字頭及び切韻清字の二条において、y を頭にもつ単字及び切韻切字に対しては、現代北京語で y を頭音とする漢字が単独に当てられるか、または反切上字に使はれてゐる。すなはち、y には現代北京音の y が当つてゐる。その漢字表記を y と転写する。

十二字頭の条において、y を頭にもつ単字中の母音字に対して当てた漢字については、以下に各例を列举する。

y を頭にもつ単字	当てた漢字	その現代北京音	その漢字表記中母音字に 当る部分の転写
ya	呀	ya ¹	a
yan	烟	yen ¹	e
yang	央	yang ¹	a
yai	呀衣切		ai
yao	吆	yao ¹	au
ye	噫	yeh ^{1,4}	e
yen	陰	yin ¹	i
yeng	英	ying ¹	i
yei	噫衣切		ei
yeo	攸	yu ¹	u
yo, yū	哟 雍窩切	yo ⁴	o
yon, yūn	哟因切		o
yong, yūng, yung	雍	yung ^{1,3}	u
yoi, yūi	哟衣切		oi
yoo, yūo	哟幽切		ou
yu	淤	yü ¹	ü
yun	淤因切		ü
yui	淤衣切		üi
yuo	淤幽切		üu

yan に当てた烟の現代北京音中の e は、その漢字表記を ei の場合と同様に e と転写する。この点については問題があらうが、yan の表す音が他からは明確に知られない以上、本稿の基く現代北京音に拠つて e と転写しておくのである。また yen に当てた陰、yeng に当てた英は、それぞれ in, ing にも当てた漢字であり、yin, yin と転写する⁽⁹⁹⁾ 従つて yan, yen に対する転写は、yen, yin となり、転写上も混同は生じない。

ye に当てた噫の現代北京音における eh は、その漢字表記を e と転写する。従つて § 39 の ei の e 及び上述の yen の e と同様に転写することになる。

yu に当てた淤の現代北京音は、ウェイド式ローマ字では yü¹ であるが、実際には単母音であるとみられる。しかし本書では子音字と母音字よりなる単字にこの漢字が当てられてゐるゆゑ、本稿では便宜上 yü と転写する。

服部先生の調査された口語では、第一字頭の当該単字はつぎの様に音読されてゐる。

ya ye yo yu yū
ja jè jò jÿ jò

すなはち、y に対して [j] が現れてゐるほか、母音が他の場合と著しく異つてゐる点に注意される。採録の語彙にもつぎの例がある。

dujèn 四 文語形 duin
ujjÿn 九 文語形 uyun

ujyndʒ' 九十 文語形 uyunju

これによつて y の文字は、半母音 [j] を表すと考へる。y の文字が表すこの音は、母音の前に立つ他の子音と音韻的に区別されよう。

w 及び w と単字をなす母音字

§ 50 十二字頭の条において w を頭にもつ単字については、以下に各例を列挙する。

w を頭にもつ単字	当てた漢字	その現代北京音	その漢字表記中母音字に 当る部分の転写
wa	窪	wa ¹	a
wan	灣	wan ¹	a
wang	汪	wang ¹	a
wai	歪	wai ¹	ai
wao	窪幽切		au
we	窩	wo ¹	o
wen	溫	wèn ¹	ē
weng	翁	wèng ¹	ě
wei	威	wei ¹	ei
weo	窩幽切		ou

すなはち、w には現代北京音の w が当つてゐる。その漢字表記を w と転写する。we の e に対して o が当つてゐる点は、§ 28 に述べた事実に関連する。なほまた漢字の窩は o, ū に、溫は on, un, ūn に、翁は ong, ung, ūng に、威は oi, ui, ūi にそれぞれ当てられ、窩幽切は oo, ūo にも当てられてゐる。この点、清字辨似の条の音同字辨似の項には、o と we の二語、on, un, wen の三語、ungge と wengge の二語、ungke と wengke の二語を意味を付してそれぞれ対照してゐる。

服部先生の調査された口語では、第一字頭の当該単字はつぎの様に音読されてゐる。

wa we
va və

なほ [v] は歯唇音であると註に記されてゐる。

これは新しい音韻変化の結果ではないかと考へる。既述の様にこの口語には歯唇音 [f] が現れるが (§ 17), これも古くは [Φ] であつたかもしれない。

本稿では、w の文字は半母音 [w] を表すと考へる。w の文字が表すこの音は、母音の前に立つ他の子音と音韻的に区別されよう。

切韻字中の母音字

§ 51 切韻清字の条において、iya に終る切韻字に対しては、現代北京語で ia の韻母をもつ漢字を当てるか、或は現代北京語で i の韻母をもつ漢字を上字とし、呀を下字とした反切を当ててゐる。すなはち、この場合の iya には ia または反切によるそれに相当する音が当つてゐる。その漢字表記をそれぞれ ia, ia と転写する。

iyē に終る切韻字に対しては、現代北京語で ieh の韻母をもつ漢字を当てるか、或は現代北京語で i の韻母をもつ漢字を上字とし、噯を下字とした反切を当ててゐる。すなはち、この場合の iye には ie または反切によるそれに相当する音が当つてゐる。その漢字表記をそれぞれ ie, ie と転写する。

iyān に終る切韻字に対しては、現代北京語で ien の韻母をもつ漢字を当てるか、或は現代北京語で i の韻母をもつ漢字を上字とし、烟を下字とした反切を当ててゐる。すなはち、この場合の iya には ie または反切によるそれに相当する音が当つてゐる。その漢字表記をそれぞれ ien, ien と転写する。

iyen に終る切韻字に対しては、現代北京語で in の韻母をもつ漢字を当てるか、或は現代北京語で i の韻母をもつ漢字を上字とし、陰を下字とした反切を当ててゐる。すなはち、この場合の iye には i または反切によるそれに相当する音が当つてゐる。その漢字表記をそれぞれ in, in と転写する。

iyang に終る切韻字に対しては、現代北京語で iang の韻母をもつ漢字を当てるか、或は現代北京語で i の韻母をもつ漢字を上字とし、央を下字とした反切を当ててゐる。すなはち、この場合の iya には ia または反切によるそれに相当する音が当つてゐる。その漢字表記をそれぞれ ian, ian と転写する。

iyeng に終る切韻字に対しては、現代北京語で i の韻母をもつ漢字を上字とし、英を下字とした反切を当ててゐる。すなはち、この場合の iyeng には in に相当する反切音が当つてゐる。その漢字表記を in と転写する。

iyai, iyei に終る切韻字に対しては、現代北京語で ieh の韻母をもつ漢字を当てるか、或は biyai の一例においては逼^呀衣^切と記してゐる。すなはち、biyai を除いてこの場合の iyai, iyei には ie が当つてゐる。これらの漢字表記を ie と転写する。ただし、biyai に対する漢字表記は biyai と転写し、この語例では iyai に iyai が表す様な音が当つてゐる。

iyō に終る切韻字に対しては、現代北京語で i の韻母をもつ漢字を上字とし、啣を下字とした反切を当ててゐる。すなはち、この場合の iyo には io に相当する反切音が当つてゐる。その漢字表記を io と転写する。

iyoo に終る切韻字に対しては、現代北京語で iao の韻母をもつ漢字を当てるか、或は現代北京語で i の韻母をもつ漢字を上字とし、么を下字とした反切を当ててゐる。么は、本書では満洲字に当てた他例はないが、現代北京音は yao¹ である。すなはち、この場合の iyoo には iao, または反切によるそれに相当する音が当つてゐる。その漢字表記をそれぞれ iau, iau と転写する。

iyūn に終る切韻字に対しては、現代北京語で ün の韻母をもつ漢字を当ててゐる。すなはち、この場合の iyū には ü が当つてゐる。その漢字表記を ün と転写する。(なほ §54 の iowen を含む切韻字参照)

上掲の切韻字中の母音字の音価については、なほ正確なことは知られない。それらの iy は、単に母音字の表す母音の前に立つ子音が硬口蓋音または硬口蓋化音であることを表す場合もあると考へられる。なほ biyai の反切は注意される。

また上掲の iyen, iyeng に対する転写は、in, ing に対する転写と同様であるが、同じ漢字を用ゐた場合もある。清字辨似の条の音同字辨似の項には、burgin と burgiyen の二語、gin と giyen の二語、ulin と uliyen の二語を意味を付してそれぞれ対照してゐる。

§ 52 異施清字の条にはつぎの語がある。

45才	fiyoo	非啣切	fio	箕
49ウ	fiyoose	非啣塞切	fiosē	ひさご
〃	hiyoošun	稀啣書温切切	hiošun	孝行
〃	hiyoošungga	稀啣書翁啣切切	hiošuna	孝行な人

49ウ	hiyoošulambi	稀啣 切書拉啣	hiošulami	孝行する
45オ	kiyoo	欺啣 切	kiō	輿, 橋

これらの語例の iyoo には、前節で述べた切韻清字の条の場合とは異なる反切下字が当てられて、異なる音を表すものである。この反切下字は、前節に述べた様に、切韻清字の条では iyo に終る切韻字に当てられてゐる。しかし、これら二つの場合に、この反切下字が同じ音を表すとは断定できず、iyo の場合に対して iyoo の場合の方は長い母音を表すかもしれない。上掲の語例中、fiyoose の fiyoo はシナ語の瓢（現代北京音 p'iao²）を、また hiyoošun 及び他の二語の hiyoo はシナ語の孝（現代北京音 hsiao⁴）を写したものとみられ、kiyoo はシナ語の橋、輿（現代北京音では前者は ch'iao², 後者は chiao⁴）を写したか、或は少くともこれらの語に関係があるとみられる。iyoo に終る切韻字に対して本書において異なる二つの音を示してゐるのは、シナ語における [iau] と [io] の方言間の相違もしくはその二音間の歴史的変化を反映するものと考へられる。（§ 48 参照）

§ 53 切韻清字の条において、子音文字と uwa の結合した切韻字及び kūwa, gūwa, hūwa に対しては、現代北京語で ua の韻母をもつ漢字を当てるか、或は現代北京語で u を韻母とする漢字を上字とし、窪を下字とした反切を当ててゐる。ただし muwa の一例は別である。すなはち、この場合の uwa には ua または反切によるそれに相当する音が当つてゐる。その漢字表記をそれぞれ ua, ua と転写する。

muwa には、ma に当て、mai, man, mao の反切上字に用ゐる媽が当ててある。媽は ma と転写される漢字であり、muwa には ma が当る。

子音文字に uwan の結合した切韻字及び kūwan, gūwan, hūwan に対しては、現代北京語で uan を韻母にもつ漢字を当てるか、或は現代北京語で u を韻母にもつ漢字を上字とし、湾を下字とした反切を当ててゐる。ただし yuwan の一例は別である。すなはち、この場合の uwa には ua または反切によるそれに相当する音が当つてゐる。その漢字表記をそれぞれ uan, uan と転写する。

yuwan には、以下に述べる iowan に対すると同様に、淵の漢字が当てられてゐる。その現代北京音は yüan¹ である。この転写については、淤の転写についてと同様のことが言へる（§ 49 参照）。すなはち、この場合の yuwa には yüa が当つてゐる。その漢字表記を yüan と転写する。

子音文字と uwang の結合した切韻字及び kūwang, gūwang, hūwang に対しては、現代北京語で uang を韻母にもつ漢字を当てるか、或は現代北京語で u を韻母にもつ漢字を上字とし、汪を下字とした反切を当ててゐる。すなはち、この場合の uwa には ua, または反切によるそれに相当する音が当つてゐる。その漢字表記をそれぞれ uan, uan と転写する。

なほ hūwang, huwang に当てた慌の現代北京音には、huang¹ のほかに hêng¹ があるが、音韻逢源では、慌は子部一、乾一、婁十六、巽一にみえ、現代北京語の huang¹ に相当する音を表すとみられる。本書でもかかる音を表すとみる。

子音文字と uwai の結合した切韻字及び kūwai, gūwai, hūwai に対しては、現代北京語で uai の韻母をもつ漢字を当てるか、或は現代北京語で u の韻母をもつ漢字を上字とし、歪を下字とした反切を当ててゐる。すなはち、この場合の uwai には uai, または反切によるそれに相当する音が当つてゐる。その漢字表記をそれぞれ uai, uai と転写する。

iowan には、すでに触れた様に、現代北京音が yüan である漢字が当てられてゐる。すなはち、この場合の iowa には yüa が当つてゐる。

ciowan, jiowan, siowan, kiowan, giowan, hiowan に対しては、現代北京語で üan の韻母

をもつ漢字が当てられてゐる。すなはち、その場合の iowa には *üa* が当つてゐる。その漢字表記を *üan* と転写する。ただし *liowan* に対しては異なる。

liowan に対しては、溜湾切を当ててをり、また *niowa* に対しては姓窪切を、*niowang* に対しては姓汪切を当てた例がほかにあるが、これらについては後述する。(§54 参照)

切韻字中の *uwa*, *üwa*, *iowa* はおそらく上向二重母音を表すと考へられる。なほ *iowa* の *i* は、子音が先行する場合その子音の性質にも関するものであらう。*muwa* に対する *ma* の形は、先行する両唇鼻音が持続中の閉鎖の後出わたりにおいて閉鎖音の場合の如き破裂を起さぬから、その二重母音の副音が通常より短いときには、その唇の働きの聴き取り難いことを示してゐると考へられる。

なほ、諺文文献においては、*uwa* に対する諺文転写が或口語の上述と異なる音を反映するとみられる場合がある。(別の拙稿「満洲語の諺文文献に関する一報告」第一項参照)

§54 切韻清字の条において、子音文字に *uwe* の結合した切韻字に対しては、現代北京語で *o*, *uo* を韻母にもつ漢字が当てられてゐる。すなはち、この場合の *uwe* には *o*, *uo* の音が当てられてゐる。その漢字表記をそれぞれ *o*, *uo* と転写する。

子音文字に *uwen* の結合した切韻字に対しては、現代北京語で *un* を韻母にもつ漢字を当てるか、或は現代北京語で *u* の韻母をもつ漢字を上字とし、温を下字とした反切を当ててゐる。すなはち、この場合の *u* には *u*, または反切によるそれに相当する音が当ててある。その漢字表記をそれぞれ *un*, *un* と転写する。

yuwei, *iowei* に対しては、同一漢字の曰を当ててゐる。曰の現代北京音は *yüeh*⁴ である。すなはち、この *yuwei*, *iowei* にはこの音が当つてゐる。曰は *yüe* と転写する。

子音文字と *iowei* の結合した切韻字に対しては、現代北京語で *üeh* を韻母とする漢字を当ててゐる。すなはち、この場合の *iowei* には *üeh* が当つてゐる。その漢字表記を *üe* と転写する。ただし *liowei* に対しては異り、後述する。

なほ *siowei* に当てた薛は、現代北京音に *hsieh*¹, *hsüeh*¹ の二音がある。音韻逢源では、西部十、艮三、危十二、坤三にあり、西部十、震四、危十二にはみえないから、現代北京語の *hsieh*¹ に相当する音をもち、その *hsüeh* に相当する音はないとみられる。本書では *iowei* を含む他の切韻字に当てた漢字の現代北京音から逆に類推して、現代北京音 *hsüeh* に相当する音を表すとみる。

子音文字と *iowen* の結合した切韻字に対しては、現代北京語で *ün* を韻母とする漢字を当ててゐる。従つて §51 に記した *iyün* を含む切韻字に対すると同様であり、なほ当てた漢字もそれぞれ同一漢字である。すなはち、この場合の *iowe* には *ü* が当つてゐる。その漢字表記を *ü* と転写する。ただし *liowen* に対しては異り、つぎに述べる。

liowan に対しては、既述の様に溜湾切と、*liowei* に対しては溜窩切と、*liowen* に対しては溜温切とあるが、溜の現代北京音は不明である。しかし *iowan*, *iowen* を含む他の切韻字に対して、単独に当てられた漢字の現代北京音から逆に類推して、溜湾切、溜温切は *lüan*, *lün* の音を表すとみられ、従つて溜は現代北京音の *lü* に相当する音を表すとみる。それらの漢字表記を *lüan*, *lün*, *lü* と転写する。*liowei* に対する溜窩切については問題があるが、本書で溜を反切上字に用ゐた他の例に準じて、一応 *lüo* と転写しておく。なほ、つぎに掲げる異施清字の条の例においては、*liowei* に溜曰切と記してゐる。

niowa, *niowang* に対しては、前節に述べた様に姓窪切、姓汪切を当て、また *niowe* に対しては姓窩切を当ててゐる。子音文字と *iowa*, *iowang*, *iowe* の結合した切韻字は本条にみられないから、子音文字と *iowan*, *iowei*, *iowen* の結合した切韻字に当てた漢字の現代北京音から

類推すると、姪は現代北京音 *nü* に相当する音の如く考へられるが、姪はまた単字 *nio* に当てた漢字であり、*io* を含む他の単字に当てた漢字から類推すると、現代北京音 *niu* に相当する音と考へられる。本稿では現代北京音 *niu* に相当する音を表すとみて、この漢字を *niu* と転写する。従つて当該反切はそれぞれ *niua*, *niuaŋ*, *njuo* と転写する。

上述の様に子音文字と *uwe* の結合した切韻字中の *uwe* に *o*, *uo* が当つてゐる点は、子音文字と *o* の結合した単字中の *o* に対すると同様であり (§ 32)、また異施清字の条の多くの例にみられる *oo* に対すると同様である (§ 48)。また、子音文字と *uwen* の結合した切韻字中の *uwe* に対して *u*, *u* が当つてゐる点は、子音文字と *un* の結合した単字中の *u* に対すると同様である。この点について、清字辨似の条の音同字辨似の項には、単語ないし連語中の相当する位置に *o*, *oo*, *uwe* が現れる以外は同形である二つまたは三つの単語、連語を、意味を付して対照してゐる。また、語中の相当する位置に *un*, *uwen* がそれぞれ現れる以外は同形である二単語づつを、意味を付して対照してゐる。

§ 55 *uwe* の発音について、ザハーロフはつぎの様に記してゐる。

(前略) だが *вэ* (*we*) といふ音節は *во* (*wo*) と読まれるゆゑに、この場合、すなはち *вэ* (*we*) が子音字をともなつて別の音節を構成する他の母音字に後続するときには、*вэ* (*we*) は *э* (*e*) の代りに *о* (*o*) と発音される、例へば *tuweri туори* (*tuori*), *beikuwen бэйкуонь* (*beykuon*) (北京の満洲人によつて *бэйкунь* (*beykun*) とさへなる), *juwe чжю* (*juo*)。この場合に *о* は延ばした長い *ō* (*ō*) であり、このゆゑに北京の満洲人は *ferguwesuke фэргүвэчүкэ* といふ単語を *фэргөчүкэ* (*förgöchuke*) と発音し、*kuwesike кувэцикэ* といふ単語を *көцикэ* (*kötsike*) と発音する⁽¹⁰⁰⁾

вэ (*we*) の音節が *во* (*wo*) と読まれるといふ事実は、本稿 § 28 に引用したザハーロフの記述にみえるが、上掲のザハーロフの記述は、原文においては、欧人の書いた満洲語諸文典にみえる様な語中の *w* は黙字であるといふ説明の直後にあるものである。この記述によると、*uwe* は *uo* (*uō*) ないし *ō* と発音される。おそらく [*uə*] の如き二重母音中の中舌平唇母音 [*ə*] が後舌円唇母音 [*u*] の影響で後舌円唇母音 [*o*] となり、すなはち [*uə*] は [*uo*] となり、さらにこれが [*o:*] となると考へられる。

清文彙書に、

niowari niori 緑艷貌。与 *niowari nioweri* 同⁽¹⁰¹⁾

の語形のみえるのも、上掲の発音を反映するものとみられる。

なほ、服部先生の調査された口語にはつぎの語形があつて注意される。

dʒu: 二 文語形 *juwe*

前節に記した切韻清字の条における子音文字に、*uwe* の結合した切韻字のなかの *uwe* に当てた *o*, *uo* は、おそらく上掲の如き音を表すとみられるが、それが二重母音であるか長母音であるかは不明である。なほ *niowe* の *owe* もこの音を表すとみる。また子音文字に *uwen* の結合した切韻字のなかの *uwe* に当てた *u* は、上掲ザハーロフの記述にみえる *бэйкунь* (*beykun*) の様なシナ化した特殊な満洲語の音を表すか、或は漢字による表音のためとみられる。

前節に記した他の切韻字のなかの母音字の表す音については、ここには触れない。

異施清字の条にはつぎの語形がある。

50ウ	<i>sengguwembi</i>	僧哦嚩	<i>sēŋēmi</i>	おそれる
"	<i>sengguwendembi</i>	僧恩得嚩	<i>sēŋēndēmi</i>	絶へず恐怖の中にある

この形は、上向二重母音 [*ūə*] の [*ū*] が特に短い場合に、軟口蓋鼻音の後ではその舌の調音が聴き取り難いことを示してゐると考へられる。この形は、§ 53 の *muwa* に対する *ma* の形と

もに注意される。

なほ諺文文献においては、uwe に対する諺文転写が、或口語の上述と異なる音を反映するとみられる場合がある。(別の拙稿「満洲語の諺文文献に関する一報告」第一項参照)

§ 56 切韻字に関して異施清字の条にはつぎの例が一括されてゐる。

43オ	jiyei	節
"	yuwei	日
"	iowei	月
"	siowei	薛
"	liowei	瞿日切
"	ciowei	闕
"	jiowei	厥
"	kiowei	缺
"	giowei	絶
"	hiowei	靴

これらは、シナ語の単語ないし反切を満洲字をもつて写したものである。転写や意味は付けない。jiyei については § 51 参照。yuwei 以下の例については § 54 参照。なほ、liowei に対する反切は、切韻清字の条の場合と異り、注意される。この反切及び節、月を除く各漢字は、切韻清字の条でいづれも当該切韻字に当てられたものである。

§ 57 異施清字の条の母音字に関する語例を以下に挙げる。

47オ	ayara	愛呀拉	aiyara	家畜の乳を酸くした飲料
48オ	bayara	拜呀拉	baiyara	護衛兵
§ 40 に述べたことに関係する例ともみられる。				
45オ	ainci	安七	anči	思ふに
49ウ	ainu	阿奴	anu	なんの為に
"	aibide	阿逼得	abidě	どこに

ainci については § 12 参照。

清語易言に、

ai (矮) を、a (啊) と言ふ、

とあるのは、これらの語形を指したものであらう。

48ウ	morin	牟唹因	mourin	馬
-----	-------	-----	--------	---

牟の漢字を満洲字に当てた他の例はみられないが、現代北京音は mou² であり、mou と転写する。mou の表す母音は、mo の表す母音より狭い円唇母音であるか、または二重母音であらう。

47オ	ume	惡摸	ěmo	…するな
"	umesi	惡摸詩	ěmoši	甚だ

清語易言にも umesi の形が載つてゐる。

umesi (狠) を、e me zi と言ふ、

zi である点が注意される。この事実はすでに述べた。(§ 18 参照)

清語易言にはまたつぎの様にあり、これらの語例に関することであらうか。

u (悟) を、e (哦) と言ふ、

50オ	fonjiha	番呢哈	fanniha	尋ねた
		または番飢哈	fanjiha	

この語についてはなほ §13 参照。

47オ ojorakū 傲飢拉枯 aujiraku できない, いけない
御製増訂清文鑑散語類にも ojirakū, ojorakū の二形がみえる。清語易言にも,
ojorakū (不可) を, o ji ra kū と言ふ,

とある。なほ §33 参照。

49ウ eimembumbi 惡意嗜嘖不嗜 ěimjebumi 嫌はれる
48ウ simacuka 書媽出喀 šumačuka 寥々たる, なにもない
47オ ecimari 惡出媽哩 ěčumari 今朝
49オ cimari 出媽哩 čumari 明日, 朝

哩の漢字は, 十二字頭及び切韻清字の二条において満洲字に当てた例はないが, その現代北京音は li^{2.3} であるから, ri に当てられた点を考慮して ri と転写する。

49オ cibun 出賓 čubin つばめ
" juciba 朱出八 jučuba ほたる
47ウ nimecuke 呢摸吃磕 nimočikě おそるべき

清語易言にもみえる。

nimecuke (可怕) を, ni me c'y ke と言ふ,

50オ seibeni 塞撥呢 sěboni 昔
46オ sisingga 詩生啊 šišěna むちゃ食ひ

§19 参照。

50ウ ekšemi 惡珂詩嗜 ěkošimi 急ぐ
48ウ šešemi 賒詩嗜 šěšimi (はちなどが) さす

ザハーロフの満露辞典には šešemi とともに šesimbi の語形も載せてゐる。

48ウ cecike 七七磕 cícikě 小鳥
49オ geli 雞哩 ğili また, も亦
47ウ ujen cooha 屋襟綽哈 wujin čoha 漢人の兵隊
49オ gejenggi 哥精衣 gějini ことば多くて騒々しい人

清語易言にもみえる。

gejenggi (嘴碎) を, ge jing i と言ふ,

45ウ genggiyen 金陰 ğinin 清い

清語易言にもまたみえる。

genggiyen (清) を, gin yen と言ふ,

47ウ niyanciha 呢烟差哈 nienčaha 青々した草
47オ acila 阿差拉 ačala 腰をとつて投げろ
50ウ manggici 犛啊七 maŋači 極端な場合には

清語易言にもみえる。

manggici (大不過) を, mang a ci と言ふ,

50オ tarbahi 他尔逼稀 tarbihi かはをそ (動物名)

ザハーロフの満露辞典には tarbahi とともに tarbihi の語形も載せてゐる。

47ウ ufuhi 屋非稀 wufihi 分けまえ

清語易言にもある。

ufuhi (分例) を, u fi hi と言ふ,

ザハーロフの満露辞典にも ufuhi とともに ufihhi の語形も載せてゐる。

50オ faijuma 爨衣渣媽 fajuma いけない

清語易言にもある。

faijuma (不好了) を, fai ja ma と言ふ,

50ウ buktulin 不珂呖^{哩因切} bukotēlin 袋の一種
 ザハーロフの満露辞典にも buktulin とともに buktelin の語形が載つてゐる。

49ウ kunusun 枯奴孫 kunusun 旅行用の干し飯
 清語易言にもある。

kunesun (行糧) を, ku nu sun と言ふ,

ザハーロフの満露辞典には, kunusun のほかに古廢語として kunusun も載せてゐる。

49ウ kurume 枯嚙模 kurumu 衣服の一種
 52オ emu mangga jefu 惡模拏屋遮夫 ěmu manwu jěfu 一口食べる
 48ウ burulaha 不尔拉哈 burlaha 敗走した

清語易言にもある。

burulaha (敗了) を, bur la ha と言ふ,

ザハーロフの満露辞典にも, burulambi とともに burlambi の語形を載せてゐる。

47ウ uruldembi 屋尔得喀 wurdēmi 馬を駆けさせて遅速をためす
 以上の二語においては母音が脱落してゐる。なほ後者の l の脱落については § 16 参照。

47ウ nokai ja 挪堪渣 nokan ja 甚だ容易なる
 48オ hala hacin 哈拉衣哈親 halai hacin 多様な
 49オ cisu 出雖 čusui 特殊, 独自, 所有
 45オ yaya 呀衣矣 yayi すべての

矣の漢字を満洲字に当てた他の例はないが, その現代北京音は i³ であり, i と転写する。

清語易言ではつぎの形がみられる。

yaya (諸凡) を, ya i と言ふ,

48オ haša boo 哈詩撥 haši bo 穀類を入れて置く小さな物置
 boo については § 48 参照。

以上の四例においては, 名詞所有格語尾 i が関係するとみられる。

48オ bade 如作虚字用(もし 八得諾 badēnē …のところに, …ときに
 虚字に用ゐると)
 46ウ ai 愛 ai なに
 哀 ai あゝ(嘆声)

ai には特に什麼, 嘆声と意味を付し, 二者に異なる漢字を当ててゐる。愛は, 十二字頭の条で ai に当てた漢字であり, 現代北京音は ai⁴ である。哀は, 本書では満洲字に当てた他の例はみられないが, 現代北京音は ai¹ であり, 愛と同様に ai と転写する。この二形は音調上の相違を示したものであらうか。音韻逢源で, 愛は巳部六, 坎二, 胃十七, 坤三にみえ, 哀は巳部六, 坎二, 胃十七, 巽一にみえ, やはり現代北京音の ai⁴, ai¹ にそれぞれ相当する音を表してゐて, 現代北京語と四声が一致してゐる。

また四十七丁裏には, -kakū, -hakū, -kekū, -hekū, -kakūngge, -hakūngge, -kekūngge, -hekūngge 中の -kū, -kūng の上には阿の字を加へて読むことが記されてゐる。阿は a と転写される。これらの諸形は語源的には ka, ha, ke, he に akū, akūngge が結合したものであり, この記述は回帰的な発音を示すものとみられる。

以上雑然と列挙したが, 異施清字の条の例はこれを以つて尽きる。これらの語形についての考察は, 他日に譲りたい。

清語易言には, なほつぎの一例があることを付記する。

bocihe (醜) を, bo ci hi と言ふ,

同書の当該箇所の語例と音形の例も、これですべてである。

昭和十九年六月三十日（1944）

註

- 1) 服部四郎博士 満洲語音韻史の爲めの一資料（音声の研究 第六輯 東京 昭和十二年）290頁。
- 2) А. Рудневъ, Новыя данныя по живой манджурской рѣчи и шаманству, Санкт-Петербургъ 1912.
本文においてルードニェフの調査の口語といふのは、この資料に基く。
- 3) 同上書 31頁註二。
- 4) А.О. Ивановскій, Маньчжурская хрестоматія Выпускъ второй, Санктпетербургъ 1895 中の Тексты, записанные по произношенію, Образцы нарѣчій илійскаго края はラートロフが記録したものと目次に記されてゐるが、口語音韻の資料としての価値がなほ不明であるので本稿では一応用ゐないことにする。
- 5) W. Radloff, Aus Sibirien Zweiter Band Leipzig 1893 二版 349頁。
- 6) 1) に同じ。本文において服部先生の調査された口語といふのは、この資料をさす。なほ、本文の以下において述べる様に、ラートロフの調査の錫伯方言と異なる点もある。
- 7) И. Захаровъ, Грамматика маньчжурскаго языка, Санкт-Петербургъ 1879 61頁。
- 8) 服部四郎博士 吉林省に満洲語を探る（言語研究 第七, 八号 東京 昭和十六年）。
- 9) 裕恩 音韻逢源 四卷 道光庚子（道光二十年）の序がある。
この書については、永島栄一郎 近世支那語特に北方語系統に於ける音韻史研究資料に就いて（続）（言語研究 第九号 昭和十六年）60, 61頁に紹介されてゐる。
- 10) Amiot, Grammaire tartare-mantchou, Paris 1787 5—7頁に文字及び発音について記してゐる。本稿において引用する箇所は、すべてこの部分である。なほこの文法は十七世紀の Verbiest の記述の翻譯と言はれる。もしこの部分もその翻譯であるならば、さらに溯つて十七世紀のものとなるわけであるが、Verbiest の記述は未だ見ることができぬので、この点は不明である。
- 11) W. Radloff, Phonetik der nördlichen Türksprachen, Leipzig 1882 109頁。
- 12) P. Schmidt, Chinesische Elemente im Mandschu (Asia Major Vol. VII (1931, 1932), VIII (1932, 1933) Leipzig) (第七巻の) 581頁。
- 13) Juntu (屯図) 一学三貫清文鑑 (Emu be tacifi ilan be hafukiyara manju gisun i buleku bithe) 四卷 乾隆丙寅（乾隆十一年）。
- 14) 欽定清漢対音字式 乾隆三十七年内閣奉と記してある上論と道光十六年内閣奉と記してある上論とを冠した書に拠る。前者の上論だけを冠した書は未見である。
- 15) 12) に同じ。（第七巻）581頁。
- 16) 満漢成語对待 (Manju nikan i fe gisun be jofoho acabuha bithe) 四卷 年代不詳のこの書について、渡部薫太郎氏（増訂満洲語図書目録5頁）は乾隆中期の書とみ、Fuchs (Beiträge zur Mandjurischen Bibliographie und Literatur 80頁) はさらに古く1702年頃のものとする。
- 17) 7) に同じ。37頁 原文中の満洲字は Möllendorff 式のローマ字転写に改め、満洲字を転写したロシア字及び発音を示すロシア字はそのままとし、その後ロシア字をそれに近いローマ字に改めたものを括弧に入れて付す。この書については以下同様。ただし括弧内のローマ字は適宜省略する。
- 18) H.C. von der Gabelentz, Sse-schu, Schu-king, Schi-king in Mandschurischer Übersetzung mit einem Mandschu-Deutschen Wörterbuch, Zweites Heft (Wörterbuch), Leipzig 1864 46頁 右欄。
- 19) 御製増訂清文鑑 (Han i araha nonggime toktobuha manju gisun i buleku bithe) 乾隆三十六年の序をもつ。
- 20) 清漢同文全書 (Manju nikan šu adali yooni bithe) 康熙庚午（康熙二十九年）。

- 21) 滿漢字清文啓蒙の清字辨似の条の音同字辨似の項にも、この二語が対照されてゐる。
- 22) 7) に同じ。61頁。
- 23) 7) に同じ。59頁。
- 24) 博赫 (Behe) 清語易言 (Manju gisun be ja i gisurere bithe) 乾隆三十一年の序を付す。当該部分は十二丁表より十五丁裏までである。本稿に引用する箇所は、特に註を付さぬかぎりこの部分である。なほこの書のこの部分がどの様にしてできたかは、別に考察すべき問題である。
- 25) 11) に同じ。162頁 原文中の滿洲字は Möllendorff 式ローマ字転写に改める。
- 26) И. Захаровъ, Полный маньчжурско-русский словарь, Санктпетербургъ 1875.
- 27) 三合便覽 清文指要 三十五丁表。
- 28) 24) に同じ。十八丁裏, 十九丁表。
- 29) 7) に同じ。58頁。
- 30) (なし)
- 31) hūwanggiyarakū に用ゐた荒の漢字は、本書では他に滿洲字に当てた例はみられないが、現代北京音は huang¹ であり、従つて huan と転写する。cingiya に用ゐた青も、他に例はないが、現代北京音は ch'ing¹ であり、従つて cín と転写する。
- 32) W. Fuchs, Über die Altmandjurischen Akten und das Tongki fuka akō hergen-i bithe (W. Fuchs, Beiträge zur Mandjurischen Bibliographie und Literatur, Tôkyô 1936) 54頁。
- 33) 7) に同じ。61頁。隠語尻を指す。
- 34) 御製増訂清文鑑卷十九, 十二丁裏, 十三丁表。
- 35) S.M. Shirokogoroff, Social organization of the northern Tungus, Shanghai 1933. 385頁左欄 川久保悌郎 田中克己 訳 シロコ北方ツングースの社会構成 東京 昭和十七年 卷末60頁。
- 36) 顫動音 [r] が弾音ないし摩擦音 [r] に変化することは考へうる。
- 37) 拗もやはり子音のみを表すとする根拠はない。
- 38) 2) の書 33頁参照。
- 39) 35) に同じ。原本376頁。訳本 卷末47頁。
- 40) 19) に同じ。卷十三, 十九丁表。
- 41) 19) に同じ。卷十八, 三十丁表裏。
- 42) S.M. Shirokogoroff, Social organization of the Manchus, Shanghai 1924 v頁。
- 43) 服部四郎博士 滿蒙地方の言語音について (音声学協会会報43号 東京 昭和十一年) 9頁。
- 44) 43) に同じ。10頁。
- 45) 11) に同じ。109, 110頁。
- 46) 11) に同じ。57頁。
- 47) L. Adam, Grammaire de la langue mandchou, Paris 1873 15, 16頁。
- 48) 12) に同じ。(第七卷の) 585頁。
- 49) 12) に同じ。(第七卷の) 588頁。なほこの点に関する記述はまた587頁にみえる。
- 50) 12) に同じ。(第七卷の) 583頁。
- 51) H.C. von der Gabelentz, Éléments de la grammaire mandchoue, Altenbourg 1832 18頁。
- 52) C. de Harlez, Manuel de la langue mandchoue, Paris 1884 15頁。
- 53) 47) に同じ。15頁。
- 54) 7) に同じ。58, 59頁。
- 55) 7) に同じ。59頁。
- 56) 26) に同じ。591頁註。
- 57) 7) に同じ。59頁。
- 58) 7) に同じ。57頁。
- 59) 11) に同じ。57頁。
- 60) 御製増訂清文鑑卷二十一, 三十一丁表。
清文彙書 (Manju isabuha bithe) 卷四, 二丁裏。
- 61) 御製増訂清文鑑卷三十二, 四十一丁表。

- 清文彙書 卷八, 三十一丁裏。
- 62) 御製增訂清文鑑 卷三十一, 三十九丁表。
清文彙書 卷二, 三十六丁裏。
- 63) 7) に同じ。39—42頁及び44—46頁。
- 64) 47) に同じ。16頁。
- 65) 例へば, 李徳啓 阿濟格略明事件之滿文本牌 北京 民国二十四年 には四頁が転載されてゐる。
- 66) 12) に同じ。(第七巻の) 586頁。
- 67) 51) に同じ。18頁。
- 68) 52) に同じ。15頁。
- 69) P.G. von Möllevdorff, A Manchu grammar, with analysed texts, Shanghai 1892 1頁。
- 70) 渡部薫太郎 訂正滿洲語文典 大阪 大正十五年 10, 11頁。
- 71) 1) に同じ。294頁。
- 72) 1) に同じ。293, 294頁。
- 73) 瓜爾佳巴尼瑛 清漢文海 四十巻 道光元年 凡例 二丁裏, 三丁表。
- 74) 従つて本書の漢字音に区別があるのではない。
- 75) この場合及び以下のかかる場合に, 現代北京語で或母音をもつ漢字といふ表現には, 現代北京語のその母音に相当する音をもつとみられることを述べた漢字も含めることにする。
- 76) B. Karlgren, A Mandarin phonetic reader in the Pekinese dialect, Stockholm 1918 の内の Transcriptions の条及び梶原昌八 北京話音声学研究 (言語研究 第十二号 昭和十八年) の音節表参照。
- 77) 従つて佛は, 反切を併記してない場合も, 当てられた滿洲字に基いて fě, fo と区別して転写する。
- 78) 7) に同じ。52, 53頁。
- 79) 7) に同じ。53頁。
- 80) 42) に同じ。iv頁。
- 81) 51) に同じ。18頁。
- 82) 47) に同じ。11頁。
- 83) 52) に同じ。15頁。
- 84) 35) に同じ。原本387頁。訳本巻末63頁。
- 85) 8) に同じ。57頁。
- 86) このことは, ソロン語における目を意味する語形の方言的相違から考へられる。すなわち, ホロンバイル地方のソロン語において諸氏の採録した当該語形には,
- | | |
|----------------------|--|
| isal (眼), i-sali (目) | 上牧瀬三郎氏 (ソロン族の社会 東京 昭和十五年) |
| i:səɬ (njud (目)) | 服部四郎博士 (大興安嶺北部に於ける所謂ヤクト族について (音声の研究 第六輯 東京 昭和十二年)) |
| īsal (глаза (目)) | Н.Н. Поппе (Материалы по солонскому языку, Ленинград 1931) |
- があるが, 嫩江地方において採録した当該語形には,
- | | |
|----------------------------------|---|
| icáɬ (глаза (目)) S ⁴ | A. O. Ивановский (Mandjurica, Санктпетербургъ 1894) ココニ |
| járɣɣɛ (") S ³ | イフ S トハ Бутха-Солоны 布图哈索倫デアアル。 |
| járɣɣɛ (") S ⁵ | |
| ničé (") S ² | |
| ničé (") S ¹ | |
- がある。後二者はダグール語より入つたものとしてゐる。前二者は上掲の形と類似するが, 中二つが注意される。いはゆる「iの折れ」による形ではないかと思ふ。またつぎの採録語も同様である。
- 雅沢勅 目 黒竜江志稿 (巻七 地理志 風俗方言 民国二十一年)
- これはどの地方のソロン語か不明であるが, 上掲の諸形に比較して嫩江地方のものであらう。神尾式春氏も, 如何なる根拠によるか不明であるが, この書のソロン語を「嫩江流域から採取されたと思はれる」と言ふ。(同氏 索倫語雑考 滿洲国語 第二号 康德七年)

- 87) 7) に同じ。54頁。
- 88) 11) に同じ。57頁。
- 89) 藤岡勝二博士 羅馬字転写
日本語対訳 喀喇沁本蒙古源流 昭和十五年 の服部四郎博士のはしがき 2頁
註1。
- 90) 7) に同じ。54, 55頁。
- 91) 42) に同じ。v頁。
- 92) 89) に同じ。
- 93) 76) に同じ。
- 94) 19) に同じ。卷二十二, 十九丁裏。
- 95) 1) に同じ。279頁。
- 96) 7) に同じ。60, 61頁に渉る註。
- 97) 7) に同じ。60, 61頁に渉る註。
- 98) 7) に同じ。54頁。
- 99) 清字辨似の条の音同字辨似の項には, この点に関して indembi, yendembi の二語を意味を付して対照してゐる。
- 100) 7) に同じ。61頁。
- 101) 清文彙書 卷二, 二十八丁裏。
- 102) sengguwembi に対する sengguwendembi の形には, 反復ないし継続の意味の接辞が含まれてゐるとみられる。この点 guwembi (響く, 鳴く), jombi (言及する) に対して, 御製増訂清文鑑には guwendembi (屢鳴(しきりに鳴く)), jondombi (常提(いつも思ひ出し言ふ))(十四卷二十六丁裏, 五丁裏) があり, これらは同じ接辞を含むとみられる。三合便覧の清文指要(三十二丁表) は, n の後に ra, re, ro が来るとその間に da, de, do が入つてこれを支へる(墊之)と言ひ, bambi, wembi, jombi が bandara, wendere, jondoro となると記してゐる。服部先生も「bandara, wendere 等に於ける -d- は後に生じたものといへる」と印欧語の例に比較して記されてゐる(言語研究 第七, 八号 76頁)。ただし guwembi, jombi のそれぞれの活用形 guwendere, jondoro については, それらは元来 guwendembi, jondombi の活用形ではないかとも考へられる。それらが guwembi, jombi の活用形に転用されたについては, guwendembi, jondombi の文法的意味が guwembi, jombi のそれよりも re, ro の文法的意味と結びつき易かつたといふことはないだらうか。

内 容

子 音

閉鎖音

鼻 音

流 音

摩擦音

破擦音

母 音

*a**e**i**o, u, ū**sy* の *y* 及びその他

第二字頭の母音字

第十字頭の母音字

y 及び *y* と単字をなす母音字*w* 及び *w* と単字をなす母音字

切韻字中の母音字

Contents

Consonants

Stops

Nasals

l and *r*

Fricatives

Affricates

Vowels

*a**e**i**o, u, ū**y* in *sy* and others

Vowel letters in the second class of the Manchu alphabet

Vowel letters in the tenth class of the Manchu alphabet

y and vowel letters composing a single syllabic letter*w* and vowel letters composing a single syllabic letter

Vowel letters in compound syllabic letters

後記 Postscript (1987)

1. この拙論は昭和19年(1944)に筆者が作製した東京帝国大学文学部言語学科卒業論文である。在学中御指導いただいた服部四郎先生に、ここに改めて深甚の感謝の念を表します。

今回発表するに当っては、旧稿に手を入れ、一部を削除した。しかし、旧稿を書いた際に使用した以外の資料を加えたり、それによって補訂することはせずに、内容は当時の水準のままとした。かなづかいも、もとの通りに旧かなづかいによる。

旧稿のうち第31, 40節は、“Über zwei Vokalveränderungen im Mandschurischen”の標題で *Oriens Extremus*, 11. Jahrgang, Heft 1 (Wiesbaden, 1964) に発表した。漢字のローマ字表記はやや変えた点がある。その他、若干の箇所を、他の拙文にふくませたことはあるが、全体を発表することはなかった。なお本文でたびたび引用した拙文「満洲語の諺文文献に関する一報告」は、前の年に書いたもので、卒業論文の副論文としたが、同じ標題で『東洋学報』33巻2号(1950年)、36巻4号(1954年)に発表した。その後、同じ資料をとり扱った論文として、成百仁教授の「満洲語音韻史研究 *틀위 하여, 清文啓蒙異施清字研究*」其一(『언어학』 제 1호, 서울, 1976)、其二(『明大論文集』第8輯, 서울, 1975)が発表されているが、扱い方も必ずしも同じでなく、拙文全体をあえてここに発表した。本誌の紙面をさいていただいたことを札幌大学女子短期大学部に感謝する。

拙論は、当時柴田武学兄所蔵本の『満漢字清文啓蒙』を拝借してそれに拠った。これは同書第I類に属する版本である(下記第2節参照)。ここに改めて謝意を表す。なお、どんな版本であったかは、もう一度お借りしてたしかめたい。

なお、『満漢字清文啓蒙』の満洲語音表記に用いられている漢字(および反切)ならびにその漢字が表す満洲字の音節の一覧表を拙論の付録とすべきと考えるが、これを略したことをゆるされたい。なお、異なる版本では表音漢字が異なることがあり、調べなければならない。

2. 『満漢字清文啓蒙』の文献学的所見は、拙文「ヨーロッパにある満洲語文献について」(『東洋学報』45巻3号, 1962年)の114-116ページにふれた。なお、その後筆者が米国・ソ連で目睹した下記の別の版を、その拙文115ページの箇所に増補したい。

第I類 4 永魁齋・中和堂版。ソ連アカデミーアジア諸民族研究所蔵。とびらには、左に *cing wen ki meng bithe*, 右に清文啓蒙, まんなかに *yung kui jai dzang ban* 中和堂蔵板とある。四冊。各巻一冊。

第II類 3 永魁齋・老二西堂版。米国国会図書館蔵。とびらには、左に *cing wen ki meng bithe*, 右に清文啓蒙, まんなかに *yung kui jai dzang ban* 老二西堂蔵板とある。題簽には、*Manju nikan hergen i cing wen ki meng* 満漢字清文啓蒙とあるほかに、*yuwan ban* 原板とある。四冊。

なお、第II類本は、「切韻清字」の条で *niowe* と *kūwang* の間の部分がおちていない。しかし、また、米国国会図書館所蔵の文宝堂版および上掲の永魁齋・中和堂版本もその部分がない。つまり、このことは、第II類だけでなく、第I類本の一部でもそうである。上記拙文115ページ下段に「また「切韻清字」の条で後者は前者にくらべて *niowe* と *kūwang* のあいだの部分かとんでいない。」と記し、この点を両類のちがいの一つとしたのは妥当でなかった。

3. §5 注10についての補記。筆者はその後 F. Verbiest の “*Elementa Linguae Tartaricae*” をパリ国立図書館ではじめてみる事ができた。これおよび、さらに P. Aalto, “The “*Elementa Linguae Tartaricae*” by FERDINAND VERBIEST, S.J., Translation” (*Zentralasiatische Studien*, 11, Wiesbaden, 1977) によってみると、J. Amiot の文法の中の文字・発音の条の大綱は、Verbiest の文法に基くものようであるが、拙論に引用した発音の諸点のほとんどは、Verbiest の文法のなかの文字・発音の条にそのままには見出されず、これからの翻訳の

ようなものではない。なお、Verbiest の文法の文字・発音の条は、17世紀の満州語の発音をみる上の貴重な資料となる。

4. §11 への注記。n に終る語に i, akū がつづくとき、i は ni となり、akū も naku となる例があることに関しては、卒業論文提出後、服部先生から、蒙古語を満州字で書き表した文献において n に終る語につづく形式の頭の母音のまえに n が書かれている例について、これを nn と発音する口語はいまだ見出されないという御注意を受けた。この箇所は、この御教示にもとづいて書きかえた。

5. §12 への補記。満州語では古くから多くの単語で、文語形中 ngg と書かれる部分が ŋ であったのではないかと考える。そして、満州語では母音間に m, n のほかにまた ŋ があらわれ、これらが音韻的に区別されているとみる。

6. §24 への補記。『清漢文海』の凡例の上掲箇所の冒頭の意がはじめわからず、特に山左などの意味について、当時倉石武四郎教授の御教示をえた。中国語において、北京語の chi, ch'i などに対して山東方言ではそれぞれ ki, k'i などと発音されることは、出村良一「満洲語に就いて」(宮越健太郎ほか『短期支那語講座』第一巻 東京 昭和16年 14版, 14, 15ページ)に記されていた。

満州語における尖団のちがいを扱った文献としては、ほかに『円音正考』がある。筆者は、西ドイツ・マルブルク大学図書館で、乾隆8年(1743年)の原序、道光10年(1830年)の序をもつメレンドルフ旧蔵本によって1960年はじめてその書に接した。その音の区別は、中国音韻史の問題に関係し、故藤堂明保教授はすでに「ki- と tsi- の混同は18世紀に始まる」(『中国語学』94, 1960年)において、『円音正考』の記述にもとづき、中国語で記と濟、希と西などがそれぞれ同音となったことについて「北京語において、ki, hi および tsi, si の類が口蓋化を起して、tsi (チ), si (シ) の形となり始めたのは、大体乾隆時代、つまり18世紀である。」と述べられている。

しかし、既述のように、雍正8年(1730年)の序をもつ『満漢字清文啓蒙』においても、このことがうかがわれる。『音韻逢源』およびさらに『満漢字清文啓蒙』におけるこの点については、すでに讚井唯允氏の「音韻逢源と等音」(『人文学報』140, 東京都立大学人文学部, 1980)の168, 169ページに指摘されているが、くり返しふれると、満州字 ki, gi, hi にはそれぞれ歙(溪四), 雞(見四), 稀(曉三)の漢字を当て、「咬字念」と付記してその音を表記している。ところが、たとえば軍(見三), 群(見三)をそれぞれ giowen, kiowen に当てるとともに、またそれぞれ jiowen, ciowen にも当ててその音を表している。ただし、前二者に当てた場合には「咬字念」と付記している。また、飢(見三)を ji に当て、闕(溪三)を ciowei に当ててそれらの音を表している。一方、満州字 si, ci, jing には、それぞれ西(心四), 七(清四), 精(精四)を当ててその音を表記しているが、しかし、たとえば、羞(心四), 秋(清四), 切(清四), 接(精四), 焦(精四)の各漢字を、それぞれ満州字 sio, cio, ciye, jiye, jiyoo に当ててその音を表すばかりでなく、これらの漢字をそれぞれ hio, kio, kiye, giye, giyoo にまでも当て、また絶(從四)を giowei に当ててその音を表している。これらの場合には、さらに「咬字念」と記している。このことは、上にあげたような見(三四), 溪(三四), 群(三), 曉(三)などの声母が、それぞれ精, 清, 從, 心などの声母と混同していたことによるものとみられよう。

また、『満漢成語对待』には、その後筆者もこの本に接してみると、その「文法」の条のなかに(7葉前)、満文でその点についてつぎのように述べている。gi ki sere juwe hergen, mudan i urgen ilenggu i beye, heheri de wajirengge, ilenggu dubede obufi, weihe de beneci ji ci ombi (gi ki という二つの文字音調は、舌の本体と口蓋で仕上がるもの、舌を先にして歯

に送れば, *ji, ci* となる)。この調音の説明は、尖団の区別のさきがけとみられよう。この書物は、既述のように W. Fuchs 教授によれば康熙年間の1702年ごろにさかのぼるものである。

満州語について *ki* と *ci, gi* と *ji* の区別がとり上げられるということが、二言語使用の上で、中国語にその区別がないことによるとすれば、中国語にかつてあった音韻上のその区別が失われる変化がはじまったのは、満州語文献における尖団の別についての記載の年代より先行するはずである。このように考えて満州語文献によってみると、乾隆期より古く、雍正年間、おそらくさらに古い時期（17世紀後半）にすでに中国語の一部の方言（多分、北京語をふくむだろう）に広くその変化がおきていたのではないかとみられよう。

しかし、その変化に関係する個々の満州語語例は、さらに古く『旧満州档』にみられる。たとえば、その崇徳元年九月（1636年）の条には、「將軍」の中国語語音を写した語形は *jiyang-jiyun* とある。このような語例は、少くとも、軍の声母（見三）がすでに口蓋化したことを示すものであろう。ただし、そののちの満州語文語には、もとの音に忠実な *jiyanggiyūn* という復古的な語形があらわれる。

しかし、ここにはこれら清代の満州語文献によってみてきたが、中国語音韻史におけるこの問題は、清代以前の文献によって、時代的にさらにさかのぼることが、すでに趙蔭棠『中原音韻研究』（1936年）の88—93頁に論ぜられている。

7. §27への注記。その後考えるのに、満州字 *ce, je, še, se* は、漢字を当てるほかに、反切を特に付記してあるのだから、この方の表記をとり、*če, je, še, se* と転写すべきであろうかと思う。しかし、満州字 *ce, je, še* に対する反切上字の声母はそり舌音であるのに、反切下字の韻母を中舌の *ê* とせず前舌の *e* としているのは、十分には納得がいかない。なお、満州字 *se* については、反切上字の声母が *s*（歯音）であるので、反切下字の韻母が *e* であることは不自然でないだろう。

8. §31注86についての補記。ソロン語で語頭に前舌狭（やや狭か）母音をもつ目の意味の単語は、その母音が長いようであるから、*yasa* を *i* の折れの語形とみる根拠にはなりえないだろう。その根拠には、むしろオルチャ語などの対応単語（オルチャ語では、P. Schmidt, *The Language of the Olchas* (Acta Universitatis Latviensis VIII, 1923) によれば *isali*) の語頭の前舌狭（またはやや狭）母音が短いことをのべた方が適切であった。なお、この単語の第一音節母音の変化については、その後の拙文「ツングース語の変遷」（『言語の系統と歴史』東京岩波書店 1971年）284 ページ参照。

9. §37への補記。蒙古語音を満州字で表記した文献としては、さらにほかに「御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑」や *Han i araha manju monggo gisun i buleku bithe* (*Hagan nu biciksen manju mongol ugen nu toli bicik*) がある。第37節に掲げた語例について、前者（「三合切音清文鑑」）の漢滿対訳語と満州字表記も同じであることは、拙文「ふたたび満洲語の諺文文献について」（『朝鮮学報』26輯, 1963年）の注11にふれた。後者 (*Manju monggo gisun i buleku bithe*) でも、同様であり、*den* には *ūndur*, *juhe* には *mūsu*, *gucu* には *nūkur*, *duin* には *derben* と、また *saman* には *būge*, *camhata* には *būrtu*, *buku* には *būke*, 一方 *tulhun* には *burkuk* と各満州語単語にそれぞれの蒙古語単語を当て、このように満州字表記していることをつけ加えたい。

10. 母音の音韻解釈については、母音字 *i, e, a* が表す各母音 [*i, ə, a*] および母音字 *o, u* が表す少くとも二つの円唇母音 [*ɔ, u*] は、それぞれ音韻的に区別されよう。第二、第十字頭の母音字および切韻字の母音字が表す重母音ないし母音連続の音韻解釈については、満州語口語の精しい調査研究も参照してあらためておこなわれねばならない。

正 誤 表

満漢字清文啓蒙に於ける満洲語音韻の考察 (1)

札幌大学女子短期大学部紀要第8号(通巻28号)(昭和61年9月)

ページ	行	誤	正
5	下カラ10	あ。	ある。
6	下カラ3	不明	不詳
7	21	ぐらい	ぐらゐ
8	下カラ20	母音	母音字
8	下カラ9	子音	子音字
11	7	ĝ	ǰ
11	23	いう	いふ
12	19	たがい	互
12	29	雞	雞
13	9	子音	子音字
14	11	いう	いふ
14	下カラ16	niuan	niuan
14	下カラ13	ǰ	ǰ
14	下カラ3	よう	様
16	6, 7	he	hē
16	20	なお	なほ
16	27, 28	g	g
19	29, 30	雞	雞
19	29, 30	ǰ	ǰ
22	下カラ9	sspirée	aspiré
24	下カラ5	子音	子音字
24	下カラ4	母音	母音字

満漢字清文啓蒙に於ける満洲語音韻の考察 (2)

札幌大学女子短期大学部紀要第9号(通巻29号)(昭和62年2月)

ページ	行	誤	正
3	下カラ21	以上は,	以上は, 多く
3	下カラ17	仏	佛
6	下カラ15	ɾ	r
6	下カラ12	鷄	鷄
10	4	e ^{1.2}	ê ^{1.2}
10	9	噎が使はれず	哦が使はれず
10	21	仏	佛
10	23	fe	fē
11	15	言語	言語
13	9, 10, 11, 32	鷄	鷄
13	下カラ17	齋	齊
15	下カラ2	仏	佛
23	下カラ4	ne	nē